台大日本語文研究第 22 期
2011 年 12 月，頁 167-204
2011-05-19 收稿，2011-06-22 通過刊登

他動詞「挖」（掘る）的意義分析
—以分析「挖」的多義性及其框架機能為中心—

謝豐地正枝*

摘要

本稿的目的首先在於：解明構成動詞「掘る」意義概念的原型（prototype），也就是其中新的意義特徵之後，進一步對「掘る」的「基本義」及由其基本義延伸出來的多義性的別義所構成的，動詞「掘る」的整體意義結構。

第二點在於，由前述的意義結構所支撐的動詞「掘る」在因應各種相異的狀況時雖然會形成各自的「框架（frame）」，但在構成各個個別框架的構成成員之中，在何種狀況下，那些詞或者語句會歸屬於被顯在化的集團，那些又會歸屬於被潛在化的集團呢？針對這點本稿將舉出例句進行考察。

第三，說話者「視點的相異」會造成動詞「掘る」所表現概念發生微妙的變化，這樣的語言現象究竟與框架結構有什麼關係呢？本稿將對此進行分析。

接著第四點，本稿將以「苗木を庭のある地点まで運んで、そこに穴を掘った（將樹苗搬到庭院裡的某處，並在那兒挖了洞）」這個例句爲例，通常聽者藉由理解這個句子可以推論出接下來的動作是「掘った穴に苗木を植える（在挖出來的洞裡種樹苗）」，本稿指摘我們人類這樣的「推論」機制和動詞「掘る」所造成的框架結構有多深的關係。

本稿將基於認知意義論的意義分析法及框架分析法，對前述的四個問題進行分析、解明，最後以關係圖的方式來呈現框架結構。

* 台灣大學日本語文學系教授

關鍵詞：隱喩的意義拡張、意義構造、核心的意義特徴（prototype）、
潜在的句成分、框架（frame）

An Analysis of the Semantic Structure of a Japanese Verb “掘る(to dig)”—Analyzing its Polysemic Meanings and Functions of Frame Supporting the Actions Expressed by “掘る(to dig)” —

Hsieh-Toyochi, Masae*

Abstract

This paper intends to analyze concepts expressed by the Japanese verb「掘る＝to dig」, to clarify semantic phrases forming core meanings termed “prototypes,” and to illustrate its semantic structure supported by a group of semantic phrases related to these prototypes. In order to clarify the semantic structure supporting the verb「掘る」, the analysis discusses how individual polysemic words demonstrated by 「掘る」 are formed and /or extrapolated from the basic concept by mechanisms used to expand its meanings. These mechanisms include metaphorical expansion as well as metonymical expansion. These polysemic words form the semantic structure supporting the concepts that the verb 「掘る」 expresses.

Further, this analysis discusses words and phrases that form the frame structure which supports expressions that the verb「掘る」 illustrates under certain circumstances. These words and phrases include parts of speech spoken by a speaker, and those that are latent. Both parts of speech whether spoken or latent are semantically joined and form the frame structure. The paper analyzes how the frame structure functions and activates latent elements when the speaker switches the focus of

* Professor of the Department of Japanese Language and Literature, National Taiwan University

attention to different parts of speech within the sentence.

In conclusion, this paper defines cases of the speaker switching to polysemic words from the basic meaning expressed by the verb「掘る」. The function of frame structure is critical to transforming latent stand –by elements to active participants in the polysemic words verbally communicated by the speaker.

This paper illustrates the frame structure consisting of all the dig's polyseimic meanings in the final page.

Keywords: metaphoric extension, semantic structure, prototype, latent parts of speech, frame

他動詞「掘る」に対する意味分析
——「掘る」の多義性及びフレームの機能・構造に対する分析を中心に——

謝豊地正枝*

要旨

本稿の目的は、第一に、動詞「掘る」の表す意味概念を形成する「プロトタイプ」と呼ばれる中心的な意味特徴を明らかにした上で、「掘る」の「基本義」及びその基本義から派生した多義的な意味を解析すること、そして、これらの基本義及び全ての多義的別義によって形成される「掘る」の全体的な意味構造を明らかにする。第二に、そのような意味構造に支えられている動詞「掘る」は、さまざまな異なる状況に応じて、それぞれ異なる「フレーム（frame)」を形成するが、その時々の状況に応じた別々のフレームを構成する構成成員の内、どのような状況下においてはどのような語や語句類が顕在化されているグループに属して、どのような語や語句が潜在化されているグループに属していると考えられるのか、について、例文を上げて考察する。第三に、話し手の「視点の相違」によって「掘る」の表す概念が微妙に変化する言語現象に、フレーム構造がどのように関わっているのか、を分析する。更に、「苗木を庭のある地点まで運んで、そこに穴を掘った（後でその苗木を植えた)」という例文を用いて、その例文を聞き手が理解することによって、「掘る」の動作に連鎖して起こることであろう次の動作が、「(掘った穴に）苗木を植える」という動作であるという「推論」のメカニズムと、第四に、その推論のメカニズムに「掘る」の作るフレーム構造がどのように関わっているのか、という、以上の四点を、認知意味論に基づいた

* 台湾大学日本語文学科教授

意味分析法及びフレーム分析法によって分析・解析して明らかにする。

以上の分析によって明らかにされた結果に基づいて、結論として、「掘る」という概念を形成する意味特徴としては、「掘る」の対象となる「地面・土地」や「材木・木版」や「岩」のような「全体」と、掘る対象となる土や塊などの「掘り起こす物」と、「掘る」行為によって地面、或いは、材木や岩の表面から、下に向って穴が形成されるので、この「掘る」の動作による結果として形成される「くぼみ若しくは穴」という「形成物」、という、三つの要素が絶対不可欠な意味特徴であることが分かった。そして、「掘る」の作るフレーム構造には、「掘る」の意味概念とその概念を支えるこれらの「プロトタイプである意味特徴群とその組み合わせ」、並びに、それを知るための知識の枠組みと知識の集合体によって構成される「フレーム」構造を図によって示す。

キーワード：メタファー的意味拡張、意味構造、プロトタイプ、潜在的文成分、フレーム

他動詞「掘る」に対する意味分析
――「掘る」の多義性及びフレームの機能・構造に対する分析を中心に――

謝豊地正枝

一、はじめに

（一）本稿の目的と問題提起

本稿の目的は次の四点である。認知意味論に基づいて、第一に、他動詞「掘る」の概念を支える意味構造を明らかにする。第二に、例えば、「苗木を持って来て、庭に穴を掘った（後で、その苗木を植えた）」文中の「掘る」のフレーム構造を形成する顕在化された構成成員と潜在化されている構成成員には、どんな語・語句がカテゴリー化されて含まれるのか、を明らかにすることである。第三に、異なる文脈における「掘る」の作るそれぞれの異なるフレームは、これらのカテゴリー化された個々の構成成員に対して、共通にどのような機能を示すのか、そして、第四に、「掘る」のフレームを形成する構成成員の内、潜在化されている構成成員を焦点化し、具現化された文中に顕在化されている個性成員へと変化させた場合に、「掘る」の作るフレームはどのような機能を示すのか、という以上の四点を分析・考察して明らかにする。[1] 最後に、分析によって明らかになった事実に基づいて、他動詞「掘る」の多義性及びフレームの構造を図に示す。

よって、本稿では、他動詞「掘る」の多義性のみならず、「掘る」が形成する「フレーム構造とその機能」についても、分析・考察してそのメカニズムを解明することを問題として提起する。

---

[1] この原稿は、2009年7月に日本の名古屋大学で開催された「台湾大学・名古屋大学合同研究論文発表会」において著作者が発表した小論文に加筆したものである。

（二）研究の手順

先ず、第一に、『広辞苑』、『新明解国語辞典』、『岩波国語辞典』、による他動詞「掘る」の普遍的な意味・用法について比較しながら述べる。そして、それぞれの辞書による定義の共通点及び相違点を明確にする。加えて、認知意味論に基づいたさまざまな視点から「掘る」の表す意味概念の特質を抽出して指摘し、その特質を形成する意味特徴に、もし、特殊性が発見できれば、それらを明白にする。以上を踏まえた上で、本稿では「苗木を植えるために、庭に穴を掘った（後で、苗木を植える)」文を文例として取り上げて、「掘る」の作るフレーム構造とその機能に関して分析・考察する。結果として、明らかになった「掘る」の多義性、及び、「掘る」のフレーム構造を図示する。

二、他動詞「掘る」の多義性に対する分析

（一）他動詞「掘る」の表す基本的な概念に対する考察

他動詞「掘る」は「を」格と組み合わさって、物に対するはたらきかけを表す。[2]そのため「掘る」はその動作・行為が完了した段階で、はたらきかけを受ける対象物に物理的な変化を引き起こすという性質を示す具体動詞である。まず、他動詞「掘る」に対する『広辞苑』による、第一に、「平面をこそげてくぼみをつける行為」という意味・用法を用いた下記のような文例が示してある。[3]

（1）地に穴を掘る。

（2）池を掘る。

における「掘る」の意味・用法に加えて、第二に、「土を取り除き、中に埋まっているものを取り出す」という目的を重視した意味もある。その意味・用法を表現する下記の文例が示してある。

（3）芋畑の土を取り除いて、地中に育った芋を掘り出す。

（4）地中の石油を掘り出すために「油井」を掘る。

---

[2] 言語学研究学会編『日本語文法・連語編』むぎ書房、1983 年、p.24-p.25。
[3] 新村出編『広辞苑』第五版、岩波書店、1998 年、p.2475。

次に、「岩波国語辞典」による「掘る」の意味・用法としては、第一に、「地面や材木などに穴をあける」意味を表す文例として下記の（6）（7）の二文例が挙げられているが、説明文に基づいて、下記の第（8）文も考えられる。[4]

（6）井戸を掘る。

（7）みぞを掘る。

（8）別の材木の継ぎ目にするため、材木に穴を掘る。

においては、『岩波国語辞典』では、『広辞苑』に記載されているように、「掘る」という行為・動作によって変化を受ける対象物が「地面」のみに限られておらず、「材木」を含んでいることが分かる。また、第二の意味・用法として、「土地に穴をあけて、地中にある物をさがし取る」という定義が記載されている。この意味を表す文例としては、

（9）石炭を掘る。

が挙げてある。そのため、第二の意味・用法は、『広辞苑』と同じであることが分かる。

では、『新明解国語辞典』ではどのように定義されているのであろうか。第一の意味・用法としては、「土地・岩・材木などに穴をあける」と述べてある。そのため、「掘る」の動作・行為によって変化を受ける対象物は、「地面・土地」や「材木」の外に「岩」にまで広がっていることが分かる。[5] また、第二の意味・用法としては、「埋まっている物を取り出す」と述べてある。そのため、第二の意味・用法は、『広辞苑』及び『岩波国語辞典』に述べられている第二の意味・用法とほぼ同じであると見なすことができる。

以上の基本義の外に、「掘る」という動作・行為にはどんな性質があるかについて、我々人間の生きる営みの実際的な状況との関連において考える。

（10）人類は風雨・風雪を避けるために、丘や小山に穴を掘っ

[4] 西尾実・水谷静夫他編『岩波国語辞典』第六版、岩波書店、1995年、p.1023。
[5] 金田一京介・金田一春彦他編『新明解国語辞典』三省堂、1990年、p.1033。

て身を守ったり、寝食を含む生活を営んだりする場所を作った。

（11）戦時下には、人々は土中に「防空壕」と呼ばれる深い穴を掘って、空中からの攻撃を受けた時にその中に逃げ込んで命を守った。

における「掘る」行為とは、「人が風雨、風雪や動物の攻撃から自身の身を守るという防御のために」丘や小山に穴を「掘る」行為をすることを表す。

（12）人類は生存するために、木の実を採ったり、植物の穂を摘んだり、土中の根菜類を掘ったりして食べ物を確保した。

における「掘る」は、「食料を探すために土を掘る」の意味を表す。

（13）食料を確保するために、地表に穴を掘って「動物などの獲物」を穴に落とし込んで生け捕ったりした。

における「掘る」は、食料となる獲物を獲るために「穴を掘る」意味を表す。

（14）寒い地方の山間部に住んでいる人々の間では、地中に穴を掘って新鮮な野菜を、野菜が収穫できない冬季のために蓄えておく習慣がある。

における（10）文から（14）文中における「掘る」は、「我々人間は、自らの命や大切に思う人々や所持品を守る目的のために、また、地中の石炭や石油を利益を得るためやさまざまな用途に利用するため、という、「人はある目的のために」「地面・土地」や「材木・木版」や「岩」に穴を『掘る』」動作・行為をすることを表す。

次に、「穴を掘る」と時間的に連続して発生する、後接する動作との連鎖関係について考える。

（15）人間は、自分の大切な所有物を守る為に、土中に穴を掘って埋めて隠した。

（16）人が死んだ場合には、死者を悼むために土に穴を掘って死体を埋める。

の（15）・（16）の二文例中における「掘る」は、「土に穴を掘って＋（その後で、何かを）埋める」というように、「穴を掘る」と「その

掘った穴に何かを埋める」という二つの動作・行為が時間的に連鎖して生じることを示す。意味的には、「掘る」は「人間は何かを埋める目的のために」「土に穴を掘る」のであることには変わりはない。その為、例えば、

（17）木の枠組みを組むために、材木を掘ってあけた穴に別の材木を埋め込む（或いは、嵌め込む）。

において、「土・地面」ではなくて「木材」を「掘る」のであっても、「別の材木を埋め込む（或いは、嵌め込む）目的のために」「材木に穴を掘る」という、「何かを埋める（或いは、「嵌める」）」という目的のために「掘る」行為をする、のは同じであると見なせよう。

関連して、（10）～（14）の五文中の「掘る」動作と、（15）～（17）の三文中の「掘る」動作とは、意味的にはどのような点において差異があるのかを考察する。（10）～（14）の五文中の「掘る」動作に後接する「話し手自らの生存に関わりのあるものや大切なものを守る」目的を遂げたいという動作主の意思を表す動作・行為であり、それらの動作・行為は、「穴を掘った直ぐ後」のみならず、時間を経た後でも何度も繰り返して行うことができる動作を指す。それに対して、（15）～（17）の三文中の「掘る」と、後接するそれぞれの「大切な所有物を埋める」、「死体を埋める」という動作は、「穴を掘った」後で、時間的には直ちに連続して連鎖的に行われており、しかも、極めて稀な場合を除いては、ほぼ「一回性」の性質を示している点に差異が見出されると考えられよう。

以上の考察に基づくと、「掘る」の基本義の示す特質としては、対象物に働きかけて、もともとの物を「もようがえ」させる行為・動作である動詞であることが分かる。そのため、動作主は、「掘る」という動作によって、すなわち、「地面」・「材木」・「岩」などをこそげる行為、或いは、それらの「地面」・「材木」・「岩」から塊を取り除く動作・行為によって、それらの対象物に「くぼみ」或いは「穴」を形成した結果、もともとの対象物の表面・中身を物理的に変化させることができる。そして、「掘られた対象物」としての「地面・地

中」や「材木」や「岩」には、形成物としての「穴」が出現するのである。

この「掘る」の基本的概念に近い意味特徴によって形成される動詞としては、すなわち、「『掘る』の概念に類義する意味を表す」別の動詞としては、「くり抜く」、「彫る」、「えぐる」、「あばく」、「耕す」、「鋤く」、などがあることが分かる。また、以上のような「掘る」の基本的概念に対する分析と考察に基づくと、「土を取り除いて、地中に埋まっているものを取り出す」という概念は、まず、対象物が「土・地面」に限られていることと、「土を取り除いて、地中に埋まっているものを取り出して、それを取り除く行為」と、「土を取り除いて、地中に埋まっている物を利用するため、或いは、利益を得るために取り出す行為」の二種類に分類できる。この点に関しては、『広辞苑』、『岩波国語辞典』、『新解明国語辞典』の三文献共に、単に「土を取り除いて、地中に埋まっているものを取り出す」と説明しているのみであるのは、不十分であると感じられる。加えて、これら二種類の意味概念は、第一の意味概念とは別の意味系統であると見なす方が妥当であると本稿は指摘したい。

（二）「掘る」の表す「方向性」とは「必須不可欠な条件か」に対する考察

この項においては、他動詞「掘る」は、動作・行為を続けて進めていく過程において、動作・行為を始めた結果生じた「空隙＝穴」がもともとの位置から「方向性を示しながら移行する」性質を示す。動作の対象物に働きかけて、「もようがえ」をさせるという、例えば、「投げる」、「広げる」、「ほどく」、「燃やす」、等の具体動詞群の内では、「投げる」のみがそのような「方向性」を表す性質を示す。そのため、「掘る」の概念を形成する中心的な意味特徴群であるプロトタイプに、果たして「掘る」の示す「方向性」が必要不可欠な核心的な意味特徴として含まれているか、否か、を考察する必要がある。

「掘る」と「投げる」という二動詞の表す行為は、共に、もともと対象物を「移動させる」目的のために開始されるのではないため、

「掘る」も「投げる」も移動動詞に属さない。但し、「投げる」の場合は、「から」格と「まで」格、或いは、「へ」格などと共に用いられて、ある地点から別の地点まで「投げる」という動作を表す場合には、もともとの「もようがえ」の性質から移動を表す「うつしかえ・位置換え」の性質を表す動詞への変化が可能である。しかし、「掘る」はそのような性質を表さず、「穴を掘る」場合には、「穴」の位置は変化しない。ただ、「穴の深さ」が垂直的に変化することは認められるが、これは「穴の位置換えとかうつしかえ」を表現しない。この点において、「投げる」の表す概念との間に差異が見出される。

次に、「掘る」の概念を支える意味構造にとって、「掘る」の方向性を表す意味特徴が核心的な意味特徴であるか、どうか、という点に関して考察する。例えば、土中に穴を掘る場合には、「土を取り除く」行為に重点が置かれており、その行為の目的に従って穴を掘る方向性が決定される。そのため、方向性は、「掘る」という動作・行為そのものに意味的に含まれているのではなくて、「掘る」という動作・行為をする動作主の特定の目的とその穴を掘る場所に従って「掘る」方向性が限定されるという関係にある。

（18）蟹は自分の大きさに合わせて穴を掘る。

の場合は、川底や湖底などの蟹の棲む場所の土中に穴を掘るので、この場合の穴の方向は、(a) 縦に垂直になりがちであろう。もし、蟹が川岸を形成する泥土の中に穴を掘るのであれば、この場合の穴の方向は、(b) ほぼ斜め下の方向へと掘ることになるであろう。

（19）ある海鳥は、崖に穴を掘って巣を作る。

においては、海鳥が掘る穴の方向性は、崖に対してほぼ水平になるであろう。次に、

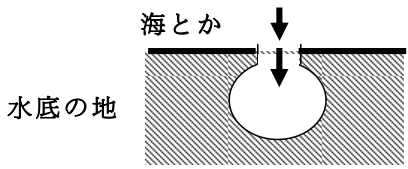
（20）鉄道の線路を通すため、工夫は丘に穴を掘る。

における「掘る」は、鉄道の線路を通すためという目的のために、穴は水平に掘り進んで、しかも向こう側に貫通しなければならないであろう。

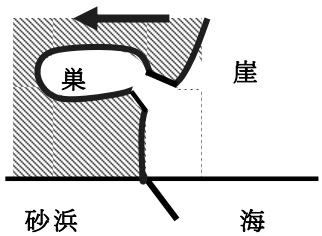
（21）工夫は石炭を掘り出すために坑道を掘る。

の場合には、工夫は石炭を得るために、先ず、坑道を縦に掘り下げて、ある一定の箇所に到達した時に、通常、横道として右か左かのどちらかに、水平に掘り進んで行くであろう。以上、これらのそれぞれの穴の方向性を、「図 1」から「図 4」に示す。

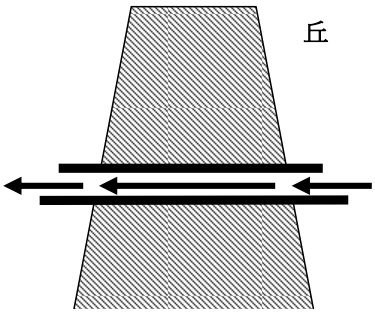
「図 1」文例（18）の表す穴の方向性



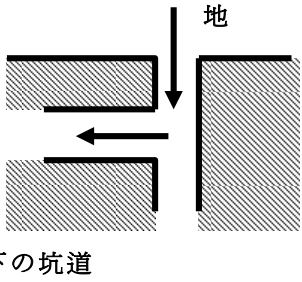
「図 2」文例（19）の表す穴の方向性



「図 3」文例（20）の表す穴の方向性



「図 4」文例（21）の表す穴の方向性



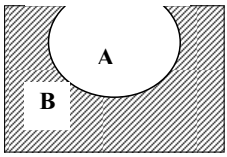
上記の「図 1」から「図 4」までの各図を分析すると、「掘る」のプロトタイプを支える意味特徴の組み合わせには「方向性」が必須条件として含まれていないことを明白に示す。また、これらの図は、「掘る」動作・行為をした結果として「穴」が現れること、そして、「穴の方向性」は動作主の目的によってその方向が変化すること、などを示す。

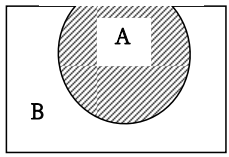
最後に、「掘る」と「彫る」が、同じ「材木」という対象物に働きかける場合に表す概念の差異について考える。認知意味論的な視点に基づけば、ある対象物からそれを成しているある一部分を取り除いた場合に、動作主の意図・意思・心理的要素に基づいて、動作主

が対象物か、或いは、取り除いた部分か、どちらの部分に焦点を当てるかによって、「掘る」と「彫る」のどちらの動作であるかが決定されるという選択上のプロセスを経ると見なす。このような「視点の相違が意味上の相違及び表現上の相違を生じさせる」という認知意味論的な視点に依拠すれば、「掘る」と「彫る」という二つの異なる動詞が表す意味は連続性を示すことが分かる。[6]「図５」によれば、「掘る」と「彫る」という意味的に連続している動作を表す二つの動詞の内、どちらを選択して表層において具現化させるか、という選択プロセスには、ある状況下において、話し手が「どの文成分」に焦点を当てるかという「焦点化」による多義派生プロセスが関わっている。

「図 5」「彫る」「掘る」の意味的な連続性を表すイメージ・スキーマ

【焦点化】は「**B**」＝取り除かれる材木の塊が焦点化されている。





焦点化は「**A**」＝材木にあけた穴が焦点化されて

「彫る」　　**「掘る」**

認知意味論に基づいた國廣哲彌説によると、話し手が **A**（取り除く部分）に焦点を当てる場合に「掘る」という動詞を用いてその意味を表現し、反対に **B**（取り除かれる部分）に焦点を当てる場合には「彫る」という動詞を用いてその意味を表現するのであると言うことができよう。[7]この分析に基づけば、「掘る」の概念の意味特徴は、＜動作主によるある特定の目的のために＞＜主に地表・材木・板･岩等から塊を乗り除いて＞＜その結果、穴（間隙）をある一定の深さに至るまで形成する動作・行為＞という意味特徴の組み合わせ

---

[6] 國廣哲彌『日本語の多義動詞―理想の国語辞典Ⅱ』大修館書店、2006 年、p.244-p.248。

[7] 「焦点化」とは、語の多義派生の一つのタイプである。その他の主なタイプには、「心的視点の位置」、「アスペクト多義」、「具象化転用」、「メタファーの比喩的転用」、「メトニミーの比喩的転用」、「時空間推移」等がある。國廣哲彌『前掲書』、p.11-p.25。

をプロトタイプと見なすことが出来る。

以上の分析と考察の結果、「掘る」という動作・行為には、特定の方向性を示す意味特徴が必須不可欠条件として含まれていないことが指摘できよう。

（三）「掘る」の概念を支えるプロトタイプの抽出に対する考察

この項においては、「掘る」の表す意味概念を支える意味構造について考える。「掘る」の基本義としては、本稿は、前記の三冊の辞書による共通した定義として、(1)「土・地面」や「材木・木版」や「岩」の平面をこそげて「くぼみ」をつける動作、或いは、「穴」をつくる動作、が最も基本義に近いものと判断せざるを得ない。尚、『広辞苑』による「掘る」の表す意味・用法は、「地に穴を作ったり、けずったりする行為、或いは、ある目的のためにそのような行為をすること」という視点を偏重していてそれが基本義であるかのように説明してある点が指摘できるが、この点について、「掘る」の対象物は「地」だけではなくて、「材木・木版」や「岩」も含まれることを指摘しておかねばなるまい。

また、「掘る」の第二の意味系統として、地中の中の物を取り除く目的のための、(2)「地をけずって草木を根ぐるみ取る動作・行為」、或いは、「地中から土塊を直接取り除いたりする動作・行為」が認められよう。続いて、「掘る」の第三の意味系統として、地中の中の物を獲得する目的のために（3）「何らかの利益を得るため、或いは、利用するために、穴を作って物を探し取る行為」、が別に分類できると考えられよう。[8] 「掘る」の意味概念は、このように目的別に、意味的に異なる三系統の意味特徴によって形成されているという点に特異性があると本稿では指摘したい。その為、「掘る」の意味概念は、次の三つの異なる視点に基づけば、三種類の動作が含まれることが分かる。

（22）祖父は庭を掘って、好きな木を植える。

（23）私はお腹が空いたので、裏の畑で芋を掘って食べた。

[8] 新村出編『広辞苑』岩波書店、1990 年、p.2051。

（24）尾張徳川藩主は名古屋城を築いた時に、外敵を予防するために、外側に深い堀を掘った。

において、(22) から (24) の文例中の「掘る」は表面的には同じ意味を表しているように見える。しかし、「掘る」動作・行為の対象物が、直接的な対象物であるか、間接的な対象物であるか、という視点から考えると、意味的に差異が見出される。すなわち、(22) の文例中の「掘る」はいずれも「庭」、「道路」、「畑」、などを直接「掘る」行為を指し、これらの「庭」、「道路」、「畑」は対象目的語を成す。この場合の「掘る」の概念は、「三種類の基本義の内の、第一種系統のもの」であると認めることができよう。(23) の文例中における動作主はこれらの物を地中から取り出して獲得することを目的として「掘る」行為をしたという視点から考えられる「掘る」行為であり、この場合の「掘る」の対象物は「芋」、「石炭」など、動作主に何らかの肯定的な益をもたらす対象目的語である。これは「基本義が三種類の別系統に分かれている基本義の内の、第二種系統のもの」であると解釈できよう。

これに対して、(24) の文例における「掘る」の対象物である「堀」は、掘った結果として生じる「結果対象語」である。これらのカテゴリーのものには、「穴」、「井戸」、「堀」「トンネル」などがある。[9] 認知意味論的な視点に基づいて、このタイプの「掘る」は第一の基本義から枝分かれしたものと見なして、本稿では意味的には「三種類の基本義の内の、第三種系統のもの」であると解釈して扱うことができるであろう。

（四）「掘る」の多義性に対する考察

この項においては、「掘る」が多義性を示すや否や、という点について考察する。

（25）種芋を植え付けるために、地中に穴を掘る。

における「掘る」が表す概念は、＜地中にあるものを埋める（或い

[9] 國廣哲彌『前掲書』、p.245-p.246、及び、深田智、中本康一郎、2008 年、『概念化と意味の世界』山梨正明（編）、研究社、p.5-p.55 の内容を参考にした。

は植える）目的のために＞＜土塊を直接取り除いて「空隙＝穴」を生じさせる動作・行為＞という意味構造によって形成される「掘る」である。この概念を形成する意味特徴は、「掘る」の「第一の基本義＝多義的別義―［1］が表す意味概念を形成するプロトタイプの内の部分的な意味特徴である。この事実によれば、「掘る」の表す「第一種の基本義」を形成する意味特徴と、「掘る」の表す「第三種の基本義」を形成する意味特徴の内、前述のように共有するものも見出されるが、全く同一ではないことが分かる。

また、「第三種の基本義＝多義的別義―［1］」のような「結果対象語」を持つタイプの「掘る」の表す概念は、『広辞苑』による「掘る」の意味としては「第一の基本義」として記載されていることは既に述べた。そして、この相違は、認知意味論的な観点を基にして考えた、話し手による視点の相違によるものであることも既に指摘した。では、このタイプの「掘る」、すなわち、「第三種の基本義＝多義的別義―［1］」は、なんらかの意味関係を基に、別の多義的別義を派生させているか、どうか、について考える。

（26）彼はその事件の顛末を公開したので、自分で墓穴を掘った。

における「掘る」は慣用句の一部分を構成している文成分であり、「墓穴を掘る」全体で「自分が滅びる道を自ら求めることのたとえ」[10]として用いられる例である。この多義的別義-［2］は、実際に死ぬ用意をするために自ら墓穴を掘る行為、或いは、死ぬ人のために墓穴を掘って葬る準備を整える行為、などのもともとの意味から、メタファー的に意味拡張して、＜（まるで実際に死ぬ用意をするために自ら墓穴を掘る行為をするのと同じように）＞＜自分が滅びる道を自ら求めるようなことをする行為＞という意味特徴によって形成される「墓穴を掘る」という概念である。

（27）彼女が五年前どのような理由で自殺したのか、その理由を掘り起して知りたいと言うのは、保険金を目的とした他殺の

[10] 西尾実他編『岩波国語辞典』p.1014。

疑惑を持っているからなのか。

次に、「掘り起す」には、「掘って土を起す」「開墾する」「埋もれているものを掘り出す」[11]という意味があるが、(27) 中の「掘り起す」は、これらの意味の内の「埋もれているもの（例えば、宝物・金塊のような具象物）を掘り出す」という意味からメタファーを基に意味的に拡張した抽象的な概念を表しており、その概念は＜（まるで埋もれているものを掘り出すように)＞＜隠されている理由(こと) を探し当てる行為＞という意味特徴によって形成される多義的別義—［3］である「掘り起す」である。そして、その「掘り起す」の意味としての、「隠されていることを探し当てる行為」の対象になるのは、上記の「隠された理由」以外にも、主に「隠された出生の秘密」、「隠された人間関係」、「隠された密約」、などの抽象的概念が考えられる。

関連して、この概念の対象物は「具象物」から、上記のように「抽象的概念」へと意味拡張しているが、対象物が「人」である概念へも意味的に拡張している。例えば、

（28）これは将来有望なタレントだ。掘り出しものだね。

における「掘り出しもの」とは「有望なタレント」のことを指しており、(28) 文中の「もの」は「実際的な物」から「生きている人」の意味へと拡張していることが分かる。そのため、「掘り出す」のもともとの意味からメタファー的に拡張した新しい概念は、＜よい才能を持っていながら＞＜埋もれている非常に貴重な人材(タレント)を＞＜捜し当てる＞という意味特徴によって形成される多義的別義—「4」の「掘り出す」である。

（29）もし、学問的に行き詰ったら、先人の知識をもう一度掘り返して勉強し直すのも一策ではないだろうか。

における「掘り返す」は、もともと「埋めたものを後でもう一度堀り出す」という意味であるが、メタファー的拡張によって、＜（まるで埋めた大切なものを後でもう一度思い起して堀り出すように）

[11] 新村出『広辞苑』、p.2032。

＞＜過去の知識で記憶にしまい込んで忘れてしまっていたことに＞＜後でもう一度注目して勉強し直す行為＞という意味特徴によって形成される多義的別義—［5］である「掘り返す」である。これらの意味特徴群に基づけば、［掘り返す］は「過去のものとして忘れていた（知識のような抽象的な）ものに、時間が経過してからもう一度注目する」という概念を表す。

「掘り返す」のもともとの意味概念は、「実際に自分が大切だと思った物品を土中に埋めて隠したものを、後でもう一度掘り返す行為」である。けれども、意味的に拡張した新しい抽象的な概念には、「過去に実際に自分が大切なものだと思ったことや嫌だと思った事柄で、自分が記憶の中にしまい込んでしまったものを、時間が経過してからもう一度思い起こして注目する行為」を意味するので、「良悪の出来事」の両方が含まれるものと考えられる。この拡張した概念に対応する対象語としては、「知識」以外にも、「過去の大変よい出来事」、「過去の大変悪い出来事」、「以前よかった関係でありながら、疎遠になった人間関係」、「貸した金品でまだ返して貰ってないもの」、などが考えられよう。

それぞれの多義的別義—「1」～「5」のそれぞれの概念の背景を形成するランドマーク（背景）について考えれば、多義的別義—［1］のランドマークは具象物である「地中」であり、多義的別義—［2］のは「自らの人生」という抽象的概念であり、多義的別義—［3］のランドマークは「隠された秘密」という抽象的概念であり、多義的別義—［4］のは「広い世間」という抽象的概念であり、多義的別義—［5］のランドマークは「人の記憶」という抽象的概念である。

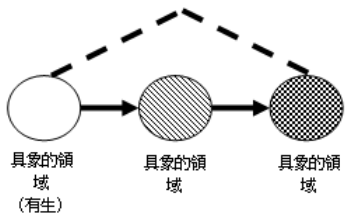
それぞれの「掘る」の表す概念を支える意味的な背景（ランドマーク）が全て異なる点を考慮に入れていれば、「掘る」の作るフレームを形成するカテゴリー化された構成成員を推察し選択する場合に目安にもなるのである。掘る」を用いた構文のメタファー的拡張は、次のような意味的な相互関係に基づいて、メタファー的拡張をしていることが見出される。それを「表 1」に示す。

「表 1」	構文のメタファー的拡張
＜具象物＞	**A.工夫は石炭を掘る。**
・	**B.彼の欲望が墓穴を掘った。**
・	**C-1.その論文は論点をもっと深**
・	**く掘り下げて分析すべきだ。**
・	**C-2.ウオール街の崩壊は、我々**
・	**がアメリカの金融制度の弱点を**
＜抽象物＞	**掘り下げて考える段階に直面し**
	ていることを示す。

また、主語・動作主が、有生の具象的領域から無生の具象的領域へと意味的な拡張をし、そのレベルから更に無生の抽象的な領域へと意味的に拡張するメカニズムを支えるプロセスを「比喩的マッピング」と呼ぶ。それらの「有生の具象的領域」、「無生の具象的領域」、「無生の抽象的領域」、の三者の間に存在する相互関係を「図 5」に示す。[12]

「図　5」メタファーによる拡張図

＜比喩的マッピング＞



以上、有生の具象物である人が実際の具象物に動作を加えて変化を起させることを表す「**A**.工夫は石炭を掘る」文中における動詞「掘る」が、無生の抽象的領域に属する意味を表す「**C-1**.その論文は論点をもっと深く掘り下げて分析すべきだ」文中の「掘る」の多義的別義へ意味的に拡張しているメカニズムを分析して、明らかにした。

[12] 山梨正明『認知構文論―文法のゲシュタルト性』大修館書店、2009 年、p.111-p.115。

三、「苗木を植えるために、庭に穴を掘った」文中の「掘る」の作るフレーム構造に対する分析

この章においては、「苗木を植えるために、庭に穴を掘った」文を例として用いて、文中の「掘る」の作るフレーム構造に関して分析する。

（一）連続する二動作の間に存在する意味的な関係と推論のメカニズムに関する分析

（30）苗木を植えるために、納屋から苗木を庭に運んで来て、庭の一角に穴を掘って苗木を植えた。

における「穴を掘る」と「苗木を植えた」という二つの動作は時間的に連続していて、本稿の第六頁に示した、(15) 文中の「穴を掘る」と「大切な所有物を埋める」、第七頁の（16）文中の「穴を掘る」と「死体を埋める」、と同じカテゴリーに属している。これらの連続している二つの動作の間には、(a)時間的に連続性が見出されること、そして、(b) 意味的に、何らかの目的・原因のために「何かを埋める」ことと、その目的・原因を完了させるために「穴を掘る」という動作をしなければ「何かを埋めることが完了しない」という状況下にあること、が共通点として見出される。

そして、このように時間的に連続的に発生する二つの動作と、これらの二つの動作は「掘る」という動作を完了しなければ「何かを埋める」という動作を完了させることが出来ないという時間的にも意味的にも連続した前後関係にある。二つの動詞句がこのような条件下にあることに依拠すれば、「穴を掘る」と後接する「何かを埋める」の二つの動作は、意味的に「メトニミー」の関係にあるものと判断できよう。その結果、

（31）ほとんどの文化では、死体を葬る場所に穴を掘った（後で、死体を埋める。）

（32）苗木を運んで来て、庭の一角に穴を掘った（後で、苗木を植えた。）

における「穴を掘った」に後接すべき「死体を埋める」、及び、(32)文中の「納屋から苗木を庭に運んで来て、庭の一角に穴を掘った」文に接続する「その後で苗木を植えた」は、表層では具現化されず省略されていても、聞き手は動作主が穴を掘った後で、これらの後接するそれぞれの「死体を埋める」、「苗木を植えた」という動作が完了したものと「推論」できる。

では、その推論を可能にするのは、どんな認知的メカニズムが働いているのであろうか。

我々人間がしばしば後接する連続して起こる動作・行為を「推論」することができるのは、(a) ある一つの動作と、(b) その動作に時間的に連続して起こる筈であろうという連鎖的な出来事が、意味的にメトニミー関係にあることによる。そして、聞き手が推論できる意味領域の範囲以内である原因としては、例えば、「掘る」という動詞の場合、「掘る」の作るフレームを形成する構成員の一つとして、「(「穴を掘った」後、連続して「苗木を植える」という、「動詞句」が認知カテゴリー化されていて、フレームを形成する構成員として機能していることによるメカニズムが働いているものと考えられよう。

(二)「掘る」の作るフレーム構造とその機能に対する分析と考察

この項においては、「掘る」の形成す「フレーム構造」及び「フレームの機能」について考える。動作主が「掘る」の持つ多義的な概念の内の、一つの意味概念から別の多義的別義で表される意味概念へと、表現上、問題なく活発に移行したい場合には、もともとの概念を支えながら、同時に新たな別の多義的別義が表す概念を形成する、という「表現変化に伴う連鎖的な言語活動」が観察される。その際に、「掘る」の拡張された多義的別義派生のメカニズムにも、「掘る」の作るフレームが機能を果たしている。「掘る」は、対象物に「もようがえ」を迫るカテゴリーに属する動詞であることは、既に述べた。しかし、「掘る」は、このカテゴリーに属する他の動詞とは異なって、動作主体の「視点の相違」によって指示する対象物が変化す

るという、ユニークな性質を持っている。例えば、「掘る」という動作・行為が人間によって実際に起こされる場所が、「地表を掘って土や石を取り除く」場合と、「地中から何かを掘り出すために穴を垂直に掘り下げて、掘った穴の中からそれを見つけたら穴から取り除いて地表に出す」という、異なる動作によって形成されている微妙に異なる概念を表す。そのため、動作主が「どの部分に視点を当てた場合には、『掘る』と言う動作・行為は、動作主は何を目的として、どんな道具を用いて、何に働きかけているのか、そして、動作主から働きかけを受けているものはどのように物理的に変化しなければならないのか、という別々の動作が組み合わさって「掘る」の概念を形成していることがわかる。そのため、「掘る」の表す概念を表現するには、『広辞苑』による定義や一般的な見方によっては、不十分ではないかという点に関して、更に深く掘り下げて考える。そして、「掘る」の多義性を分析して、その上で、「掘る」の作るフレームの構造を形成する普遍的な諸要素を指摘して、更に、「掘る」の「フレームの機能」を明白に示し、我々人間が「掘る」の概念を知る知識の集合体としてのフレーム構造を図で表示することを試みたい。

1975 年にミンスキー（Marvin Minsky）は「我々人間が新しい状況に直面した時、記憶の中からフレームと呼ばれる基本的構造を選び出す。これは人間が記憶している枠組みで、その細部を必要に応じて変更することにより、現実の世界に適合させるものである。」[13] と指摘した。そして、「『フレーム』とは、定型化された状況・場面を表すデータ構造である」と結論付けた。加えて、フレームの機能にも言及し、「フレームを構成する知識構造には、表層において言語的に表明されていない情報も暗黙に埋められている」と見なした。[14] 1992 年になって、フィルモア（C.J. Fillmore）はフレームの概念を「フレームとはそれなしでは単語が表す概念が意味をなさないよう

[13] Minsky, Marvin, “Framework for Representing Knowledge” in Patrick H. Winston (ed.) *The Psychology of Computer Vision*, 1975, New York, McGraw-Hill, p. 211-p.277.
[14] Minsky, Marvin, *The Society of Mind*, Touchstone, New York, 1985, p.261.

な認知構造」であると定義した。[15]大堀説は、「『フレーム』は日常の経験からスキーマ化を通じて形成された、容易に想起が可能な知識である。…それは出来事を理解する枠となる知識構造である」[16]と見なす。本稿は、大堀説による視点よりも更に一歩進んで、「ある事象についての可能な知識及びその知識を形成する枠組みであり、枠組みを含んだ知識の集合体である」という立場に立って、「掘る」が作るフレーム及びその機能について論旨を進める。

第一に、「掘る」が作るフレームに関わっているのは、言語化された「掘る」の外にも「掘る」と意味的に包摂関係や包含関係や類義関係にあって意味的に相結ばれている多種類の語群の言語的連合体である。この語群は「認知カテゴリー化された概念を表す語」と呼ばれる。また、この語・語群は相互に間接的に結び付けられてフレームを構成しているため、「掘る」がフレームを構成すると「掘る」に係わるこれらの語・語句群が、実際に言語化される、されないに係らず、活性化されて「スタンド・バイ」の状態にある。そして、「掘る」の作るフレームの主な機能の第一は、「掘る」とその動詞「掘る」に意味的に係わりあっていて、認知カテゴリー化されている関係にある概念を表す語の全てを同時に活性化させることである。機能の第二として考えられるのは、「掘る」を実際に言語化させるような「状況・場面」を話し手或いは当事者に思い起こさせることであろう。

（33）私は山茶花の苗木を植えるために、裏庭に穴を掘った。
（そして、山茶花の苗木を植えた。）

という「場面」に我々が直面した場合には、「山茶花の苗木を植えた」という動作は、（33）文には具現化されていなくても、文の文脈の一部として「含意」されている部分であることが推論できる。しかも、「穴を掘る」と、その動詞句が表す動作に時間的に後接して直ちに発生する動作である「苗木を植える」という動詞句とは、本稿で既に述べたように、意味的にメトニミー関係にあるため、聞き手にと

[15] Filmore, Charles J. "Toward a Descriptive Framework for Spatial Deixis" in : Robert J. Jarvella and Wolfgang Klein (ed.) *Speech, Place, and Action*, p.31-59.
[16] 大堀壽夫『認知言語学』東京大学出版会、2004 年、p.36。

っては「推論する」ことがより可能になる。

加えて、我々は（33）文中の「庭に穴を掘る」という動詞が作るフレームを構成する成員に属する類義語や意味的に関わりが有るものを含めていて、認知カテゴリー化された語・語句群を直ちに思い浮かべることができる。例えば、それらの内の主なものには、「裏庭」、「納屋」、「園芸用具」、「シャベル」、「スコップ」「如雨露」、「園芸用手袋」、「シャベルを持って家から裏庭に出る」、「如雨露を用意する」、「如雨露の中に予め水を入れておく」、「山茶花の苗木を納屋から出す」、「山茶花の苗木を納屋から裏庭まで運ぶ」、「山茶花の苗木を植える場所を決める」、」「取り除かれる土や土塊」、「シャベルで穴を作るために土を掘り始める」、「山茶花の苗木を穴に入れて植える」、「シャベルで取り除いた土や土塊をすくって穴の上まで運ぶ」、「山茶花の苗木の根の上に土や土塊をかぶせる」、「如雨露で植えたばかりの山茶花の苗木に水を注ぐ」、等がある。そして、我々人間は、最低１９種類のカテゴリー化されている語・語句・文を思い浮かべることであろう。

関連して、（33）文中の「掘る」という動作に後接する各種の連続した連鎖的な動作には、「庭に穴を掘る→山茶花の苗木を植える→土を被せる→植えた苗木に水を注ぐ」というような一連の連続した動作がある。動作主はこれらの動作を完了して、始めて（33）文の表す目的を完了することができる。そのため、単に一つの動詞である「掘る」という動作のみに着目して「掘る」の作るフレームの構造及び意味的な分析をするのは不十分であることが分かる。これらの一連の連続的動作における「掘る」の役目と「掘る」という動作が完了した後でも、更に、連続的に続く一連の連鎖的な動作の全てを終えなければ、動作主が「山茶花の苗木を植えるために」「庭に穴を掘る」行為をし、その行為を完了するために、「山茶花の苗木を植えた」目的が完全には終了しないからである。そのため、「掘る」が作るフレームは、「掘る」の動作に関連して形成される。しかも、「掘る」の動作が完了した後にも連続的に継続して「掘る」行為の目的を完遂するまでの、後接する全ての動作が作るそれぞれの個々のフレームと重層

的に重なり合いながらも、少しずつずれた状態で相互に関わりあっている。そして、全ての連鎖的動作を形成する個々の動詞が形成するそれぞれの、個々のフレームと相互に関連性を持っている。このような重層的に重なり合っている個々の動詞の個々のフレームの全てを合わせれば、総合的には、「大きいフレーム」と仮称できるような、(33)「私は山茶花の苗木を植えるために、裏庭に穴を掘った」文全体が表す概念を理解する知識の枠組みを含んだ知識の集合体を形成している可能性があると考えられよう。

この意味は、「掘る」に対する意味分析をする時には、「掘る」を単に一つの個別の孤立した動作として捉えるだけでは十分ではないことを意味する。この視点について、簡単に言えば、「(苗木を植えるために) 穴を掘る」という事象は、単に「掘る」という意味概念は、一つの動詞のみによって決定されることは不可能である。まず、「穴を掘る」という「動詞句」、次に、「どんな目的のために『掘る』行為をするか」に対する説明部分としての「苗木を植えるために」という目的の部分で、我々の頭脳の中にある知識の枠組みの中に既に組み込まれている部分を表層においてはっきりと具現化する。もし、そうでなければ、具現化しなくても、聞き手が推量できるような別の物によってその目的を推量可能にさせる。最後に文全体の文脈との相対的な意味関係によって、「(穴を) 掘る」の意味概念が決定される、という見えない思惟作用のプロセスが関わっている。

例えば、「(地面に) 穴を掘る—(地中から) 何かを取り出す」という二つの連鎖的な動作句の組み合わせ、 或いは、「(地面に) 穴を掘る—(地中の穴の中に) 何かを埋める—(穴の上に) 土を被せる」という三つの連鎖的な動作句の組み合わせ、「(地面に) 穴を掘る—(穴の中に) 植物を植える—(植えた植物と穴の隙間に) 土を被せる—(植えた植物に) 水を注ぐ」という四つの連鎖的な動詞句の組み合わせ、などのように、一連の連続的な複数の動作の組み合わせによって生じる「複数の動詞の個々の対象物に生じる複数の状態変化の全ての全体像」が形成する「大きなフレーム」の枠組において、

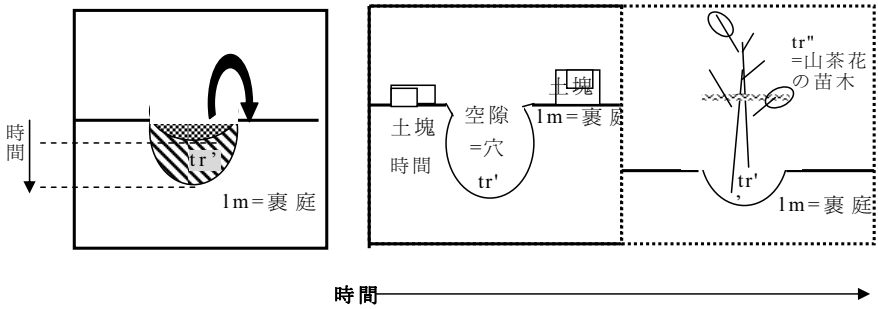
（1）その「大きなフレーム」と「穴を掘る」の作るフレームとの係わり合い方、(2)「大きなフレーム」を形成する個々の構成成員及びそれらが作る個々のフレームと「穴を掘る」の作るフレームとの係わり合い方、を合わせて段階的、総合的に、「穴が掘る」が作るフレームの意味構造及び機能を分析しなければ十分ではないと思われるのである。

動作主による「掘る」という行為によって、動作主が「山茶花の苗木を植えよう」と決めた場所を「連続的に掘る行為をしながら地表のある地点から、徐々に土塊を取り除いて行った」ので、結果として、土中に「空隙」である「穴」、すなわち、動作の結果として現れた「計生物」を生じさせたのである。この連続的な行為が長く継続すればするほど、穴の深さは地中の下方へと伸びて深さを増していく。そして、その穴が動作主の予め想定していた深さに到達した時に、厳密には「掘る」の動作は終るのである。

関連して、別の視点から考えれば、（33）文中の「掘る」ではない別の動詞、例えば、「植える」が表す意味概念を考える時、必ず「（動作主は）穴を掘る—（地中の穴の中に）植物を植える—（穴と植えた植物の間にある間隙に）土を被せる—（植えた植物に）水を注ぐ」という四つの動詞句が表現する動作の組み合わせが含まれなければ、「植える」の動作は完全に完了したとは言えないことに気付く。そして、これらの一連の連鎖的な動詞句を結び付けているのは、「掘る」が作るフレームの機能に拠るものだと思われる。

（34）私は山茶花の苗木を植えるために、裏庭に穴を掘った。の全文が表す概念を表す「イメージ・スキーマ図」を「図 6」として示す。上記の（34）文である「私は山茶花の苗木を植えるために、裏庭に穴を掘った。(そして、山茶花の苗木を植えた。)」を作るフレームの構成要素に対して段階別に分析する。

「図 6」　「私は山茶花の苗木を植えるために、裏庭に穴を掘った」の概念を表すイメージ・スキーマ図



「図 6」を説明すれば、「山茶花の苗木を植える」句の概念を表す最も右のスキーマ図は、動作主の「思考・知識の枠組み」によって「動作主の（穴を掘り終えたら、その穴の中に苗木を植えるという）意識」である抽象的な概念を表す「点線」によって示されている。この「（苗木を植えるために）穴を掘る」動作から「（土中の穴の中に）苗木を埋める」動作へと「二つの動作を連続的に起した」結果、「苗木は掘り終った穴に植えられる」ので、この「（苗木を植えるために穴を）掘る」の状況下にある「穴を掘る」のフレームと、「（掘り終った穴に）苗木を植える」が作る二つのフレームは、時間的には連続している連鎖的な動作であり、意味的にはメトニミーの関係にある二つの動詞句のフレームが重層的に重なり合っていると見なすことができよう。

そのため、「穴を掘る」が作るフレームと、「苗木を植える」が作るフレーム、のように時間的に前後していて連鎖的な動作を示している場合には、「穴を掘る」が作るフレームがその動作の終了直前に、「苗木を植える」が作る別のフレームが動作主の意識上では重なりあって部分的に重層構造を成すと考えられる。何故ならば、動作主の意識には、「穴を掘り終わる」頃には既に次の動作である「苗木を植える」動作が意識の上に上っているのが普通の状態であるからである。図の点線は、話し手が次ぎの連鎖している動作、すなわち「苗木を植える」ということを考えている状態である抽象的概念を表し

ている。そして、「穴を掘る」動作が完全に終了した時点に、部分的に重なり合って重層構造を成していたこれらの二つの動詞句が作るフレームの部分は、動作主の意識が「苗木を植える」が作る単層構造のフレームによって占拠され始めるに従って、次第に圧迫されて潜在的な意識の層へと移行するものと考えられる。結果として、動作主が手を伸ばして苗木を掴んだ瞬間から、「穴を掘る」の作るフレームは潜在的な意識の層に完全に移行して圧迫された状態下に置かれる。

しかし、潜在化されてはいるけれども、「穴を掘る」の作るフレームは連続する動作の連鎖によって認知的にカテゴリー化されて互いに結ばれている関係にある。そして、「苗木を植える」の作るフレームが表層において「植える」動作を形成していて、動作主が「苗木を植える」動作を遂行している時には、「穴を掘る」の作るフレームは「スタンド・バイ」の状態にあって、動作主が遂行している「苗木を植える」動作を意味的に支えていると考えられるのである。従って、「図６」の一番右側に示されている図が、点線で囲んであるのは、動作主が真ん中の図が示す「庭を掘る動作」を実際にしている間でも、動作主の思考の中には、点線で囲まれた右図が示すような「山茶花の苗木を植える」という、「穴を掘る」に連続した動作・行為が既に描かれていることを示している。

このように「穴を掘る」の作るフレームと、「苗木を植える」の作るフレームとが連鎖的に連携し合って「穴を掘って苗木を植える」文の表す全体的な目的が達成されることを示しているものと思われるのである。

また、「植える」の作るフレームには、文中の一つの動詞の動作を焦点化しても、その動詞と関わっていて、カテゴリー化されて意味的に繋がれている別の動詞群も「植える」行為に関わり合っていさえすれば、「植える」が作るフレームを一緒に構成することが分かる。反対に、「掘る」は「植える」のフレームを形成する重要な構成成員の一つであることが分かる。それは、「掘る」という動作・行為が先

行しなければ、「植える」動作・行為を完了できないことからも明白であろう。

「図 6」は、(34) 文が表す概念を示した経路が顕在化していることを示す。そのため、経路のどの段階においても、話し手の視点が変化する場合があることが分かる。[「**tr'**」=「空隙＝穴」] は、「掘る」動作によって、地表から地中を下方へ形態上の変化を起しつつ深く伸びる「経路」の変化状態を示す。

そして、「掘る→埋める→植える」という一連の動作全体の第二義的な対象物である植えられる「山茶花の苗木」は「**tr"**」で示され、「裏庭にある納屋の中に置かれていた場所」→「裏庭にそれを植えるべき場所である穴の側」→「掘られた穴の中」へ移動するという経路を辿って、「掘られた穴に植えられた」ことを示す。前者の「穴」の変化状態を表す経路は起点と終点が同じ場所である。後者の「山茶花の苗木」が辿る経路は、起点と終点が異なる。(34) 文中の動詞「掘る」のみが作るフレーム、及び、(34) 文全体が表す全体の概念が作るフレームを、段階別に意味分析したものを「表 2」に示す。

「表 2」　フレームの構造を段階別に形成する起点部・中間部・終点部顕在化・潜在化の概念とその組み合わせ

動作主	トラジェクター tr"	トラジェクター tr'
1.単一部分顕在化 a.起点部潜在化：—家から裏庭に出る —裏庭で山茶花の苗木を植える地点を決める —裏庭にある納屋に行く —納屋から山茶花の苗木を出す —山茶花の苗木を植える地点まで運ぶ —植える地点で動作主は穴を掘るために、立ってシャベルを手に持つ	—**tr"**は納屋から裏庭の植えられる地点に運ばれる	
b.起点部顕在化： —シャベルで土を取り除き始める c.中間部顕在化： —堀り続ける —掘るのを停止する —山茶花の苗木を穴に入れて植える		—**tr'** 空隙＝穴の口が形成される
d.中間部潜在化： —如雨露に水を入れる —水を入れた如雨露を山茶花の苗木を植える地点まで運ぶ		—**tr'**動作主が長く掘り続ければ続けるほど穴は地中の下方へ深く伸びる

e.中間部顕在化：―シャベルで取り除いた土塊をすくって、苗木の根元に持って来る f.終点潜在化:―苗木に土を被せた後でシャベルを置く状態も停止する		
g.終点顕在化 ―植えられた山茶花の苗木に土を被せる ―植えられた山茶花の苗木に水を注ぐ	**―tr"**山茶花の苗木は植えられた	**―tr'**掘る行為が停止された時に穴の深さの変化も停止
2.複数部分顕在化 a＋b：起点部潜在化・起点部顕在化 ―家から裏庭に出る ―裏庭で山茶花の苗木を植える地点を決める ―裏庭にある納屋に行く ―納屋から山茶花の苗木を出す ―シャベルで土や土塊を取り除き始める		
b＋c：起点部顕在化・中間部顕在化 ―シャベルで土や土塊を取り除き始める ―堀り続ける ―動作主が長く掘り続ければ続けるほど穴は地中の下方へ深く伸びて行く ―掘るのを停止する ―掘る行為が停止された時に、穴の状態の変化も停止する ―山茶花の苗木を穴に入れて植える		
c＋d：―シャベルで土や土塊を取り除き始める ―植えられた山茶花の苗木に土を被せる ―植えられた山茶花の苗木に水を注ぐ ―山茶花の苗木は植えられた		
c＋d：―堀り続ける ―動作主が長く掘り続ければ続けるほど、穴は地中の下方へ深く伸びて行く ―掘るのを停止する ―掘る行為が停止された時に、穴の状態変化も停止する ―山茶花の苗木を穴に入れて植える		
3.図（tr):「掘る」の対象物である地中の一部分が取り除かれた後に生じる「空隙＝穴＝**tr'**」及び「含意」された部分の概念を含む文全体の対象物である「山茶花の苗木＝**tr"**」		

「表 2」に表示される「潜在化」された部分の内、ある一つの語句、例えば、「納屋から山茶花の苗木を出す」部分を焦点化して、表層において文の一成分として具現化する。

（35）納屋から山茶花の苗木を出して、裏庭に植えるために（裏庭に）穴を掘った。（そして、山茶花の苗木を植えた。）

において、「納屋から山茶花の苗木を出す」という、もともと潜在化

されていた部分を用いて表層において文として具現化しても、「納屋から山茶花の苗木を出して」という部分が実際に文の一部分として具現化される以外に、もともとの（35）文全体の表す概念は変化しないことが見出される。これは、「掘る」が作るフレーム、及び、(35)文の全体が表す概念が作るフレーム、という二種類の複合的な組み合わせによる大きなフレーム構造によって、「掘る」に関わってカテゴリー化されている語・語句の全てが、実際に文として具現化される、されない、に関わらず、常に「活性化」されていることを示す。

このことから、「表 2」は、(35）文が表す概念全体が大きなフレームを形成していて、潜在化されている部分や省略してあったり、含意されていたりする部分であっても、常に復元可能であることを示している。そして、このような事態フレームの構成要素で顕在化・潜在化されている語・語句群がどれほど多くあったとしても、その数の多少に関わらず、「**tr'**」=「空隙=穴」、「**tr"**」=「山茶花の苗木」が辿る経路は常に[「掘る」の概念、及び、(35）文全体の表す概念]の両方に関わっていて、カテゴリー化されている全ての語・語句が概念化されていることが分かる。加えて、(35）文中の「掘る」が作るフレームの分析を通して、表層において文として表現されない潜在化されている語句を含めて、「掘る」の概念に関わるカテゴリー化された全ての語・語句が、フレームの機能によって繋ぎ合わされて活性化させられ、「スタンド・バイ」の状態に置かれていることが見出される。

次に、(35）文が表す概念の一部である「含意」の部分も含めた、所謂、表層において文として具現化されていないため潜在化されている部分にも個々の動詞・動詞句が存在し、それらが作る個々のフレームの存在と「掘る」に与える意味的な影響を観察することができる。そして、「掘る」に関わるカテゴリー化された全ての動詞･語句群は潜在化･顕在化されているに関わらず、「掘る」のフレームを形成する構成成員である。同時に（35）文中の「掘る」が作るフレームは、「掘る」以外の全ての動詞或いは語句が作る複数のフレームと

共に、フレームの機能によって重層的に繋なぎ合わされ、組み合わされていること、そして、それらの複合的なフレームの組み合わせが、文全体が表す概念が作る「大きなフレーム」構造を形成しているものと考えられる。

「掘る」が作るフレームを含んだ全文の概念が形成する大きいフレームに対する段階別の意味分析を通して、「掘る」が作るフレーム及び潜在化・顕在化されている、いない、にかかわらず、各部分における個々の動詞が作るフレームの全てを複合的に組み合わせて繋ぎ合わせる機能をフレームが示すことを解明した。このフレームの機能は、「表 1」における a，b，c，d，のどの段階においても、フレームを構成する顕在化・潜在化している構成成員の全てを常に活性化させていて、話し手によって、「潜在化された部分」が焦点化された場合には、その潜在化された部分を表層において文の一文成分として顕在化した文成分へと変化させ、具現化させることができる点を明らかにした。

以上、この項のまとめとしては、第一に、「掘る」という動作・行為を認知意味論的な視点から分析し、「掘る」の多義性を明らかにした。そして、第二に、「掘る」を「地表のある部分から土塊を取り除いて掘る→植物を植える→土を被せる→水を注ぐ」という一連の連続した動作の一つとして認知論的に捉えて分析し、「掘る」の概念に関わる語や語句の全てが、潜在化・顕在化しているに関わらず、フレームの機能によって繋ぎ合わせられて、活性化させられて「スタンド・バイ」の状態に置かれていることを解明した。

第三に、「掘る」が作るフレームの機能は、（25）文全体が表す概念が作る大きいフレームの枠内において、(a)「掘る」の動作・行為の起点から目的達成の終点までを段階別に意味分析し、「掘る」が作るフレームと、「掘る」以外の（但し、「掘る」と係わり合いがあってカテゴリー化されている）別の個々の動詞・動詞句が作るそれぞれのフレームを、重層的に繋ぎ合わせて複合的に組み合わせるために機能すること、(b)「掘る」のフレームを形成する全ての構成成員

である語・語句群を、常に活性化させて「スタンド・バイ」の状態にすること、また、(c) それらの語・語句軍を繋なぎ合せてカテゴリー化された意味的な連合体を形成していること、などについて解明して指摘した。

二、(五)「掘る」の概念を知るための知識の枠組みと集合体を表すフレーム構造の作成

「二、(一)」から「二、(四)」までの各項において分析した結果に基づくと、「掘る」の概念を確定するには、地面のような「全体」を表すものと、土塊のようなもので動作主が「掘り出す物」と、「掘る」行為によって地面から下に向って穴が形成されるような「形生物」という、三つの要素が究極的には絶対不可欠な要素であることが明白になった。[17]それらの三つの要素を焦点化して表現する場合に「掘る」の多義性が生じる。

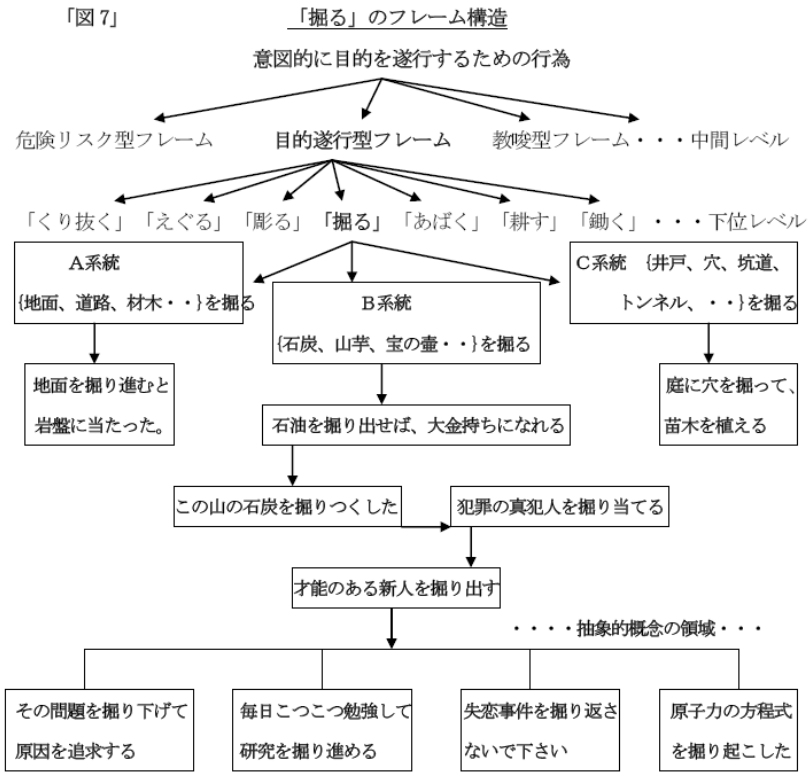
(36) {地面、庭、道路、山、崖、材木、木版、岩・・・・・}を掘る。

(37) {土、石炭、薩摩芋、山芋、埋めて置いた金貨入りの壷、・・・・・}を掘る。

(38) {井戸、穴、墓穴、坑道、トンネル、巣穴、・・・・・}を掘る。

これらの大きく分けた三つの究極的な絶対不可欠な要素を焦点化した、上記 (36) (37) (38) 文の文型を用いていて、【「掘る」に前接することが出来る「対象物」+「掘る」】によって形成される知識の枠と知識の集合体を「フレーム構造」と呼ぶことができる。

[17] 深田智・仲本康一郎共著、山梨正明編『概念化と意味の世界——ことばの科学のパラダイム返還——』研究社、2008、p.244-p.251。



四、今後の課題

今後の課題としては、例えば、詩や俳句のような顕在化する部分が潜在化する部分よりも圧倒的に少ない文体に対するフレーム分析を試みる必要がある点を指摘しておきたい。

五、まとめ

まとめとして、「掘る」の多義性を含めた「フレーム構造」を図に示した。

参考文献

文献

上野義和・守山智浩共著、上野義和編（2006）『認知意味論の諸相』松柏社。

大堀壽夫（2004 年）『認知言語学』東京大学出版会、p.36。

國廣哲彌（2006 年）『日本語の多義動詞―理想の国語辞典Ⅱ』大修館書店。

言語学研究会編（1983）『日本語文法・連語論（資料編）』むぎ書房。

坂原茂（2000）『認知言語学の発展』ひつじ書房

謝豊地正枝（2007）『フレーム』の概念と機能に対する認知論的分析―動詞『塗る』『運ぶ』『置く』『沸かす』の作るフ　レームの機能に対する分析を中心に―」『台大日本語文研究　13』台湾大学日本語文学系、p.27-p. 66。

――――――（2009）「動詞『跳ぶ』に対する認知論的フレーム分析」政治大学・国際学術シンポジウム論文集、p.121-p.132。

――――――（2010 ）「動詞「流す」のフレーム分析―「川に笹舟を流す」文中の「流す」の作るフレーム分析を中心に―」『台大日本語文研究 19』台湾大学日本語文学系。

新村出編（1990）「広辞苑」岩波書店。

西村義樹（2002）『認知言語学Ⅰ：事象構造』東京大学出版会。

深田智著、山梨正明編（2008 年、『概念化と意味の世界』研究社、p.244-p.251。

本多啓一（2005）『アフォーダンスの認知意味論』東京大学出版会。

松本曜（2003）『認知意味論』大修館書店。

山梨正明（2005）『認知言語学論考 No.5』くろしお出版。

＿＿＿＿（2007）『認知言語学論考 No.6』くろしお出版。

＿＿＿＿（2009）『認知構文論』大修館書店、p.111-p.115。

翻訳書及び外国文献

ウンゲラー／ シュミット著、池上嘉彦ほか訳（1998）『認知言語学

入門』大修館書店。

Fillmore, Charles J. and Beryl T. Atkins, 1992 ‘Toward a frame-based lexicon: The semantics of RISK and its neighbors’ in *Frames, Fields, and Contrasts,* Adrienne Lehrer and Eva Kittay, eds., Hillsdale, N.J. Lawrence Erlbaum, Assoc.

Minsky, Marvin 1975‘A Framework for Representing Knowledge’ in P.H. Winston, ed., *The Psychology of Computer Vision*, McGraw-Hill, New York。